

「民族覚醒」の起源をめぐる謬説とその継承

——独立後インドネシアにおけるイスラーム的ナショナリスト史観——

山口 元 樹

【要約】 標準的なインドネシア史の説明では、最初のナショナリスト団体は一九〇八年設立のブデイ・ウトモとされる。しかし、インドネシア独立直後の一九五〇年代に、イスラーム（商業）同盟がそれ以前に結成されたとする説が唱えられ始めた。この謬説は、当時の政治的なイデオロギー対立を背景に現れたイスラーム的ナショナリスト史観の論点の一つを成してきた。歴史学の立場からは繰り返し否定され、公的な歴史書に取り入れられることもなかったが、この謬説は大衆作家の著作によって社会に広まり、イスラーム出版市場の中では存続していった。スハルト体制崩壊後に歴史叙述の見直しが進むと、イスラーム勢力に現れた「保守化」傾向や「多数派主義」の動きと相まって、イスラーム的ナショナリスト史観が脚光を浴び、この謬説も取り上げられるようになった。しかし、この歴史観は決して新しいものではなく、現在の歴史叙述の見直しが求める要件を満たすようなものではない。

史林 一〇八巻一号 二〇二五年一月

はじめに

標準的なインドネシア史において、二十世紀初頭に登場した近代的な団体によるナショナリズム運動の始まりは概ね次のように説明される^①。

開明的な医師ワヒディン Wahidin Soedirohoesodo（一八五七―一九一六）は、貧しい青年のための奨学金制度を創るべく

ジャワ各地を遊説していた。バタヴィア（現ジャカルタ）の原住民医師養成学校（STOVIA）の学生であったストモ Soetomo（一八八八—一九三八）らは彼に会い、その人柄に深い感銘を受けた。学生たちの目標は奨学金制度設立を超え、人々の連帯と発展を目的として一九〇八年五月二〇日にブディ・ウトモ Boedi Oetomo（「至高の徳」の意）という団体の結成に至った。これがインドネシア史における最初のナショナリスト団体とされ、その設立日は独立後に「民族覚醒の日 Hari Kebangkitan Nasional」と定められた。ただし、ブディ・ウトモは指導権を年配のプリアイ（priyai、ジャワの貴族層）が握ってしまったため、保守的で政治性の薄い団体に留まることになる。その一方、ブディ・ウトモ設立の数年後に、中部ジャワのスラカルタでバティック商を営んでいたサマンフディ H. Samanhoeði（一八六八—一九五六）によってイスラーム同盟 Sarekat Islam が創設された。この団体は指導者の地位を引き継いだチョクロアミノト H. O. S. Tjokroaminoto（一八八二—一九三四）の下で、数年の間に大衆的な基盤を持った政治団体に発展していった。

今ではあまり話題にならないが、かつて研究者の間ではイスラーム同盟の設立過程をめぐって議論があった。そこで争点となったのは、イスラーム同盟の前身で、一九〇九年に設立されたイスラーム商業同盟 Sarekat Dagang Islam からの改編がいつなされたのかということであり、ほとんどの研究者は一九一一年か二年とする説をとっている。^②ところが、インドネシア国内では、独立達成直後の一九五〇年代に、イスラーム商業同盟は一九〇五年一月一六日に設立され、そのちょうど一年後にイスラーム同盟に改編されたと一部の人々が唱え出し話題になった。そしてこの説の根拠となったのが、イスラーム同盟の創設者であるサマンフディ自身の晩年の語りであった。

欧米や日本の研究者にとって、イスラーム同盟の設立過程をめぐるとの説は論ずるに値するものとは考えられてこなかった。インドネシア人歴史研究者のドゥリアル・ヌル Deliar Noer によれば、サマンフディの語った内容は誤りであると断じている。^③ コルフェル A. P. E. Kover が述べているように、この説を支持したのはイスラーム勢力の一部であり、彼らの意図はブディ・ウトモの代わりにイスラーム（商業）同盟をインドネシアで最初のナショナリスト団体と認めさせよう

というものであった^④。なぜなら、ブデイ・ウトモはジャワ主義的な性格が顕著で、その指導者たちはイスラームに批判的であつたとしばしば評されるためである。いづれにせよ、サマンフデイの語った内容は、イスラーム同盟設立時の文献史料の記述と明らかに矛盾している。ところが、彼の語りに端を発する謬説はインドネシア社会の中では存続しており、定説にはなっていないものの近年では支持を集めているようにさえ見える。イスラーム同盟の設立過程をめぐる謬説は、インドネシア国内の歴史学界ではどのように議論されてきたのであろうか。

独立後のインドネシア人による自国の歴史叙述が抱えてきた最大の問題として、「インドネシア中心主義（Indonesian-centrism）」と呼ばれるナシヨナリスト史観が支配的であり続けてきたことが指摘される^⑥。この歴史観は、国民国家インドネシアの存立の承認を最大の目的とし、そのための民族意識の醸成や国民統合の維持・促進が歴史学の中心的な課題とされた。スカルノ大統領が失脚し、新秩序と呼ばれたスハルト政権時代に入ってもインドネシア中心主義の歴史観は引き継がれ、政権の基盤である国軍を中心とした体制の正当化のための歴史解釈がなされた。他方で、独立後に政治的主導権を握ることに失敗し、スハルト時代には政権にとって潜在的脅威と見做されたイスラーム勢力の歴史観は、政府機関の出版物に見られる公的なナシヨナリスト史観とは異なるとされながらも、断片的にしか検討されてこなかった。イスラームのインドネシアへの到来の時期と経路に関して、早い時期に「純粹」なイスラームがもたらされたとする説をイスラーム知識人の一部が唱えたことが取り上げられてきたくらいである^⑦。

一九九八年にスハルト政権が崩壊し民主化の時代に入ると、インドネシア人研究者の間では従来の歴史叙述の偏向や歪曲を見直す必要性が唱えられるようになった。インドネシア内外の研究者の関心を特に集めてきたのは、それまで国民国家の中で周縁的な立場に置かれてきた地域やマイノリティ集団、国家や民族の枠組みでは語られない人々や社会、さらにスハルト時代の「犠牲者たち」の歴史を見直そうとする試みである^⑧。その一方、イスラーム勢力による歴史叙述の試みは、民主化以降においても十分に注目されてこなかった。スハルト政権崩壊から数年間の歴史叙述の方法を分類したファン・

クリンケン Gerry van Klinken は、イスラーム的なものに言及しつつも個別のジャンルとして扱っていない^⑨。その後、アグス・スウィグニ^⑩ Agus Suwignyo は、民主化後二〇一〇年代初めまでに出版された歴史教科書や通史を分析し、「イスラーム中心主義」をとる歴史叙述が現れていることを指摘している^⑪。この歴史観は、「イスラームとそれと関連する諸要素に焦点を当て、それらを歴史の舞台の中心に配置する」もので、インドネシア中心主義の歴史叙述に対峙するものとされる。ただし、スウィグニヨの研究は現状を概観した総説論文であり、イスラーム中心主義に基づいた歴史叙述における個々の論点の扱いや、この歴史観と民主化以前のイスラーム勢力の歴史観との関係は考察していない。

そこで本稿では、イスラーム（商業）同盟がブディ・ウトモよりも先に設立されたという謬説を取り上げ、それが一九五〇年代から現在までインドネシア社会の中で継承されてきた過程を検討していく。この謬説を事例として、独立後インドネシアにおけるイスラーム勢力の歴史観の一潮流について、その変化と連続性、そして現代的な問題点を提示することが本稿の目的である^⑫。その際に、インドネシアの政府機関が形成に携わった公的な歴史叙述において、この謬説がどのように扱われてきたのかという点に着目する。なお、以下では、イスラーム勢力の歴史観について、イスラーム中心主義ではなく「イスラーム的ナショナリスト史観」という表現を用いる。後述のように、確かにこの歴史観は、多数派住民の宗教であるイスラームに特権的な地位を与え、非イスラーム的あるいは反イスラーム的と見做される要素を排撃する傾向を持っている。だが、国民国家の存在を大前提とし、反植民地主義的な視点からナショナリズム運動を中心的に論じている点で、この歴史観の枠組みはインドネシア中心主義と異なるものではない。以下ではまず、イスラーム同盟の設立過程をめぐる謬説の始まりとその直後にイスラーム勢力内で起こった論争について、定期刊行物（新聞・雑誌）を主な史料として検討する。その上で、一九五〇年代から開催されてきた「国史セミナー Seminar Sejarah Nasional」での報告や教育文化省をはじめとするインドネシアの政府機関が出版した通史や教科書などを利用し、公的な歴史叙述の形成とそこでこの謬説の扱いを検証していく。

- ① 永積昭『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会、一九八〇年、四・五章；M. C. Ricklefs, *A History of Modern Indonesia Since c. 1200*, 4th ed., Hampshire and New York: Palgrave Macmillan, 2008, pp. 197-200.
- ② イスラーム同盟の設立時期に関する見解の相違については、深見純生「いわゆるイスラーム商業同盟について」『アジア経済』二〇〇九号、一九七九年；A. P. E. Korver, *Sarekat Islam 1912-1916: opkomst, bloei en structuur van Indonesië's eerste massabeweging*, Amsterdam: Historisch Seminarium van de Amsterdam, 1982, p. 27.
- ③ Deliar Noer, *The Modernist Muslim Movement in Indonesia, 1900-1942*, Singapore: Oxford University Press, 1973, p. 102. ヌール・ヌルハダの論議については後述。
- ④ Korver, *Sarekat Islam 1912-1916*, p. 27.
- ⑤ ブナイ・ハダリの特に関心初期の活動については、Nagazumi Akira, *The Dawn of Indonesian Nationalism: The Early Years of the Budi Utomo, 1908-1918*, Tokyo: Institute of Developing Economies, 1972. ワビディンはジャワ文化におけるヒンドゥー・仏教的要素を重視し、イスラーム化以降の時代をジャワの停滞期と見做してゐたとされる。
- ⑥ Gerry van Klinken, "The Battle for History after Suharto," in Mary Zubuchen (ed.), *Beginning to Remember: The Past in the Indonesian Present*, Singapore: NUS Press, 2005, pp. 233-258; Rommel Curaming, "Towards Reinventing Indonesian Nationalist Historiography," *Kyoto Review of Southeast Asia* 3 (2003) (online journal). Agus Suwignyo, "Indonesian National History Textbooks after the New Order: What's New under the Sun?" *Bydragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 170 (2014): 113-131. 二〇世紀初頭から後半までのインドネシア人による歴史叙述の概要については以下の文献を参照。H. A. J. Klooster, *Indonesiers schrijven hun geschiedenis: de ontwikkeling van de Indonesische geschiedschrijving in theorie en praktijk, 1900-1980*, Dordrecht and Cinnaminson: Foris, 1985; 鈴木恒之「戦後イデオロギイの形成——独立後インドネシア歴史学会の模索」根本敬(編)『東南アジアの二〇世紀とは何か』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇〇四年、一九一—二〇七頁。
- ⑦ Michael Wood, *Official History in Modern Indonesia: New Order Perceptions and Counterviews*, Leiden and Boston: E. J. Brill, 2005, ch. 4.
- ⑧ Zubuchen (ed.), *Beginning to Remember*, 山口裕子・金子正徳・津田浩匡(編)『「国家英雄」が映すインドネシア』木犀社、二〇一七年。
- ⑨ van Klinken, "The Battle for History after Suharto," pp. 246-247.
- ⑩ Suwignyo, "Indonesian National History Textbook," 113-131.
- ⑪ 独立後のイスラーム勢力の中には様々な思想が存在したため、本稿で取り上げるものとは別の「インドネシアという国民国家自体を否定するような歴史観を持つ者も存在してきたと推察される。ただし、これまでの研究が取り上げていないことから明らかに、そのような歴史観は現在までイスラーム勢力の中で主流とはなっていない。

一 イスラーム同盟の設立過程と創設者の語り

1 設立過程

後年にサマンフデイが語った内容と比較するために、ここではイスラーム商業同盟の誕生からイスラーム同盟への改編までの過程を先行研究に従って説明していくことにしたい。この団体の初期の活動に関しては、不明な事柄や矛盾する情報も少なくない。しかし、オランダ植民地政庁の報告書や同時代の定期刊行物に基づいた諸研究から、次のことが明らかとなっている。

イスラーム商業同盟は、ティルトアデイスルヨ R. M. Tirtadisoeryo (一八八〇―一九一八) によって、一九〇九年三月に西ジャワのバイテンゾルフ (現ボゴール)^①で結成された。ティルトアデイスルヨは中部ジャワのプロラのプリアヤイの家の出身で、ブデイ・ウトモの創設者たちと同じく原住民医師養成学校で学んだ。彼は在学中からジャーナリズムに携わり、インドネシアで最初のプリブミ (pribumi, 土着系住民)^②が所有する定期刊行物『スンダ・プリタ Sunda Berita』を創刊し、その後も『メダン・プリアヤイ Medan Prijayi』などの編集・発行を行った。彼は近代的な団体の活動にも関心を持ち、ムスリムの経済的な振興を主な目的としてイスラーム商業同盟を結成した。しかし、最初のイスラーム商業同盟は、オランダ植民地政庁から法人格を得られなかったことなどを理由にすぐに解散されてしまう。ティルトアデイスルヨは翌年初めにイスラーム商業同盟を再結成するが、筆禍事件を起こしたため同年三月から二カ月間南スマトラのランブンに流刑に処された。刑期を終えると、彼はイスラーム商業同盟の活動を再開したとされ、西ジャワのバンドウンにあったブデイ・ウトモの支部にも参加していたようである。^③

同じ頃、スラカルタではサマンフデイがブデイ・ウトモの支部に会員になっていた。^④地元の有力者であった彼に多くの

ジャワ人が従ったため、ブデイ・ウトモの支部の会員数は増加した。しかし、この団体が小規模商店の設立を計画していたことから、同地の華人は経済的な損失を被るのではないかと危惧するようになった。彼らはサマンフディを誘ってブデイ・ウトモを脱退させ、コン・シン Kong Sing という団体に移らせて要職に就かせた。コン・シンは、葬儀などでの会員間の相互扶助を目的として掲げていたが、実際には喧嘩での助勢もしていた団体である。この団体の中では華人が指導的な立場を占めていたものの、会員数ではジャワ人の方が多かった。サマンフディは、コン・シンの中のジャワ人の待遇の悪さに不満を募らせた。そこで彼は友人に頼んで、レクソ・ルメクソ Reksa Roemekso というジャワ人との相互扶助団体を設立させた。サマンフディは転居を口実にコン・シンを脱退し、しばらく後にスラカルタに戻りレクソ・ルメクソの総裁になった。

すぐにコン・シンとの対立が起ったため、レクソ・ルメクソはスラカルタの警察から法人格の有無を問われた。その際、レクソ・ルメクソから助けを求められたマルトダルソノ Raden Martodarsono が、この団体がバイテンゾルフのイスラーム商業同盟の支部であると嘘をついた。マルトダルソノはスラカルタで活動していたジャーナリストで、かつてティルトアデイスルヨのもとで『メダン・ブライヤイ』の編集者として働いていた。一九一一年十月に中国で辛亥革命が勃発するとスラカルタの華人の民族意識が高揚し、ジャワ人との抗争が頻発した。^⑤ サマンフディのイスラーム商業同盟は今度は規約の提示を警察に求められたので、マルトダルソノはティルトアデイスルヨに助言を求めた。ティルトアデイスルヨはこれに応じ、新たな規約を作ってスラカルタを訪れた。この規約の中では、「商業」を外したイスラーム同盟という名称が既に使われていた。^⑥ しかし、新しい名称は会員の間でさえずるには広まらず、しばらくはイスラーム商業同盟と呼ばれ続けた。^⑦

スラカルタのイスラーム同盟は大衆的な支持を獲得していった。しかし、同地で反華人暴動が頻発したことから、一九一二年八月にスラカルタの州長官から活動停止処分を受けた。この事態に対応するため、翌月に規約の改訂を行ったのが

チヨクロアミノトである。イスラーム同盟という名称はこれ以降定着していく。チヨクロアミノトは、東ジャワのマディウン地方のプリヤイの家の出身で、原住民官吏養成学校（OSVIA）を卒業していた。カリスマ性と政治的な才能を備えていた彼は、一九一二年のイスラーム同盟加入後すぐに実質的な指導者として台頭した。翌年にはイスラーム同盟の第一回大会が、彼が拠点を置く東ジャワのスラバヤで開催された。その後数年の間にイスラーム同盟は急速に拡大し、政治団体としての性質を帯びるようになっていった。イスラーム同盟は一九二〇年代前半になると勢力が衰えるが、チヨクロアミノトは一九三四年に亡くなるまでこの団体の指導者としての地位を維持し続けた。

その一方、イスラーム同盟の結成に中心的な役割を果たしたティルトアデイスルヨとサマンフディは、すぐにこの団体の活動から離れ、独立運動の表舞台から消えることになる。ティルトアデイスルヨはイスラーム同盟の機関誌『サロトモ Sarotomo』の編集を任されたが、印刷のための資金を流用したため団体の指導部から手を切られた。彼はその後も筆禍事件や金銭トラブルに相次いで見舞われた末に、一九一八年に若くして亡くなった^⑧。サマンフディは高度な教育など受けていない商人に過ぎず、近代的な団体を運営する能力は持っていなかった^⑨。彼はチヨクロアミノトとの主導権争いに敗れ、一九一四年に名誉総裁に祭り上げられてからしばらくすると団体の活動から手を引いた^⑩。

2 創設者の語り

サマンフディはイスラーム同盟の創設者とされたが、その存在は人々の間では次第に忘れられていった。一九二〇年代から三〇年代における彼の動向はほとんど不明で、一九二六年に精神疾患を発症したことがオランダ語紙で報じられているくらいである^⑪。一九四〇年には、久しぶりにサマンフディの名前が定期刊行物の紙面で話題になった。それによれば、当時の彼にはかつての裕福な商人の面影はなく、住む家さえ定まらず僅かな収入で暮らす極貧状態にあった^⑫。この記事はイスラーム系の定期刊行物に転載され、彼を支援するための基金の設立が呼び掛けられた^⑬。

一九四二年、日本軍の侵攻によってオランダによるインドネシアの植民地支配は終わり、その後三年半の日本軍政を経て一九四五年八月一七日にインドネシア共和国は独立を宣言した。これを認めないオランダとの間で独立戦争が起るものの、一九四九年末にインドネシアの独立は国際的に承認されることになった。この間の一九四八年に、戦時中の国民統合を促すために、ブディ・ウトモの結成日である五月二〇日に「民族覚醒」の四十周年を記念して祝賀行事が開かれた¹⁴。この日には、エジプトやシンガポールといった国外に住むインドネシア人の間でも行事が行われている¹⁵。これによって、ブディ・ウトモの誕生をナショナリズム運動の起源とする考えが公的に定められた。

さて、一九五〇年代に、既に八十歳を超えていたサマンフディが再び公の場に現れるようになった。その際に彼は、イスラーム商業同盟は一九〇五年一月一六日に創設され、翌年の同月同日にイスラーム同盟に改編されたと語り始めたのである。彼はまず一九五三年にインドネシア政府が独立運動の功労者に支給する年金を受け取るために首都ジャカルタを訪れ、その二年後に再びジャカルタに来た際に自説の「証拠」を持ってきた¹⁶。なお、サマンフディ自身による説明は文書として残っていない。後に伝わったのは、西スマトラ出身のジャーナリスト・作家であったタマル・ジャヤ Tamar Djaja（一九二一―八四）が一九五五年に聞き取った内容である¹⁷。

それによれば、イスラーム同盟は次のような過程で設立された。当時、オランダ植民地政庁はプリブミを抑圧し、商業では華人を優遇していた。この状況を憂慮したサマンフディは、商人の仲間数名とともに一九〇五年一月一六日にスラカルタの自宅で会合を開き、彼が長となってイスラーム商業同盟を結成した。イスラーム商業同盟はすぐに各地に支部を開設し、翌年の一月一六日にはスラカルタで最初の大会を開いた。その際に、団体の名称がイスラーム同盟に変更された。その後のイスラーム同盟の大会は、一九一一年の第六回までスラカルタで開催された。裕福な商人であったサマンフディは私財を惜しみなく投じ、団体の活動はジャワ中に広まっていた。だが、華人との商業での競争や植民地政庁による妨害など様々な困難に直面した。サマンフディには組織運営の知識がなかったので、バイテンゾルフのティルトアディ

スルヨのもとに赴いて助言を求めた。ティルトアデイスルヨはこれに応じ、イスラーム同盟の規約を作成した。さらに、チョクロアミノトをはじめとする有能な人材が集まるようになり、一九一一年の大会ではインドネシアの各地域ごとの活動が彼らに委ねられた。最終的にサマンフディは自分が指導者であり続けることは不可能であると悟り、一九一四年の大会でイスラーム同盟の総裁の地位はチョクロアミノトが担うことになった。

以上の語りの要点として、イスラーム商業同盟の創設者をティルトアデイスルヨではなく自身としていること、そしてイスラーム商業同盟の設立もイスラーム同盟への改編もブディ・ウトモの設立以前としていることがあげられる。そのため、彼がブディ・ウトモに参加していたことには触れられていない。つまり、サマンフディは自分こそがインドネシアで最初のナシヨナリスト団体の創設者であると主張したのである。もちろん、彼の語った内容は先行研究に即した前述の説明とは相容れず、イスラーム同盟設立時の史料と見比べれば、すぐに矛盾が見つかる。例えば、ティルトアデイスルヨは『サロトモ』の中で、自身が一九〇九年三月にバイテンゾルフでイスラーム商業同盟を結成し、それがスラカルタでイスラーム同盟として復活したと説明している^⑧。また、スラカルタのイスラーム同盟の設立過程は、原住民問題副顧問官であったリンケス D. A. Rinkes がとあるジャワ人から受け取った手紙にまとめられている^⑨。ここでは、サマンフディはブディ・ウトモのスラカルタ支部に加入した後にコン・シンに移り、そこから離脱して総裁となったレクソ・ルメクソがティルトアデイスルヨの協力でイスラーム商業同盟の支部になったことが述べられている。

① ティルトアデイスルヨとイスラーム商業同盟については以下の文献に詳しい。深見「いわゆるイスラーム商業同盟について」: Ahmat B. Adam, *The Vernacular Press and the Emergence of Modern Indonesian Consciousness* (1855-1913), Ithaca, New York: Cornell University Southeast Asia Program, p. 118. なお、ティルトアデイスルヨの最初のイスラーム商業同盟には、Sarekat Dagang Islamiah [Islamic

[ah] の表記が用いられていた。

② 本稿では現地住民を意味するインドネシア語として現代の用語であるプリプミを使うが、管見の限り、二〇世紀半ばまで同じ意味の言葉では「ブンプトラ (bunputra)」の方が一般的であった。

③ Adam, *The Vernacular Press*, p. 118. 深見は、この第二のイスラーム商業同盟は名前だけで実在しなかったと判断している。深見「いわ

ゆるイスラム商業同盟について」三二頁。

- ④ 深見「いわゆるイスラム商業同盟について」二六—三三頁。Shiraishi Takashi, *An Age in Motion: Popular Radicalism in Java, 1912-1926*, Ithaca, New York: Cornell University Press, 1990, pp. 38-43.

⑤ レクソ・ルメタンの結成や辛亥革命勃発の順番を逆にしてしている研究がある。Shiraishi, *An Age in Motion*, p. 39, 111頁は深見のシャリム・ヌルの説明に従った。

⑥ ティルトアデイスルヨの署名入りの規約は一九一一年一月九日の日付がある。ドゥリアル・ヌルは著作の中で、なぜかこの日付を「一日とつた」Noer, *The Modernist Muslim*, p. 102. また、白石は実際にティルトアデイスルヨがスラカルタにきて来たのはそれより遅く、一九一一年初めの間だと推察している。Shiraishi, *An Age in Motion*, p. 42, note 3.

⑦ 深見「いわゆるイスラム商業同盟について」三三頁。

⑧ Adam, *The Vernacular Press*, p. 123. Pramoedya Ananta Toer, *Song Penua Disertai Karya-karya Non-Fiksi (Jurnalistik) dan Fiksi (Cerpun/Novel)* R.M. Tjoto Adhi Soerjo, Jakarta, Hasta Mitra, 1985, pp. 171-174.

⑨ 深見純生「初期イスラム同盟（一九一一年）に関する研究（一）」『南方文化』第四輯、一九七七年、一五五—一五六頁。

⑩ Robert Van Niel, *The Emergence of the Modern Indonesian Elite*, The Hague and Bandung: W. van Hoeve, 1960, pp. 126-27.

⑪ “Een bijtende communist.” *Het nieuws van den dag voor Nederlandsch-Indië* (June 4, 1926): 3. “In het doorgangshuis.” *De nieuwe voorstenlanden* (June 10, 1926): 2.

⑫ “Hadji Samanhoeidi dalam Kemelataran Sangat” *Tjaja Timoer*

(April 25, 1940): 1.

⑬ “Hadji Samanhoeidi dalam Kemelataran Sangat.” *Al-Lisan* 48 (June 5, 1940): 9-10. “Disektar Toean H. M. Samanhoeidi.” *Adil* 42 (July 20, 1940): 6-7.

⑭ 深見は「民族覚醒」について、Kebangkitan Nasional について、Kebangunan Nasional について言葉が使われている。

⑮ “Mesir dan Hari Kebangunan,” *Berita Indonesia* (May 22, 1948): 1. “Putra2 Indonesia di Singapura,” *Merdeka* (May 26, 1948): 1.

⑯ Tamar Djaja, *Pustaka Indonesia: Riwayat Hidup Orang-orang Besar Tanah Air*, 6th ed., vol. 2, Jakarta: Bulan Bintang, p. 644. 深見の執筆が初版発行のサマンブダイの日記では、年号を誤り取ったところ、ジャカルタを語ったところ一九五五年のジャカルタになっている。

⑰ “Peringatan 51 Tahun Pergerakan Islam Indonesia: 16 Oktober 1905-16 Oktober 1956,” *Sarana Masjumi* 28-29 (October 20, 1956): 2-3. “Hadji Samanhoeidi Meninggal Dunia,” *Hikmah* 10/1-2 (January 12, 1957): 36, 43. 以下のサマン・ジャヤは、ジャカルタを訪れたサマンブダイから一九五五年七月三日に話を聞いたという。なか、彼の経路では、ジャカルタでサマンブダイに会ったのは同年七月とされている。“Tanggung Pendidikan SDI Sebagai Permilan Kebangunan Pergerakan Nasional,” *Horan Abadi* (August 2, 1957): 1. サマン・ジャヤの経路については、Tamar Djaja, *Riwayat Hidup A. Hassan*, Jakarta: Mutiara, 1980, p. 183を参照。

⑱ Ch. P. J. Blok, “De Javansche pers,” *Koloniale tijdschrift* (1912): 1237-1239, 1244. 『サロニヤ』の記事やサマン・ジャヤの経路については、De Ajunt-Adviseur voor Inlandsche Zaken aan de Gouverneur-Generaal, 23 Mei 1913, Verbaar 9 Augustus 1913 no. B13.

二 イスラーム勢力内での論争

タマル・ジャヤによれば、サマンフデイがイスラーム同盟の設立過程をめぐる語りを始めたのは一九五三年のことである。^①しかし、当初は反響はなかったようで、インドネシア・イスラーム同盟党 *Partai Sarekat Islam Indonesia* (イスラーム同盟の後身) も話題にしていない。同党の機関誌『*Bendera Islam*』の一九五四年の記事には、イスラーム商業同盟は一九〇九年にバイテンゾルフでティルトアディスルヨによって創設され、サマンフデイはスラカルタでその支部を設立したと記されている。この時期のインドネシア・イスラーム同盟党は、独立運動の英雄チョコクロアミノトが指導者であった政党ということを看板に掲げていた。イスラーム同盟の設立過程は彼が指導権を握る以前の話であり、それほど関心が払われていなかったようである。

しかし、サマンフデイが再びジャカルタを訪れた一九五五年半ば以降になると、インドネシアのイスラーム勢力の一部が彼の語りを積極的に取り上げるようになる。^④同年には、イスラーム商業同盟とイスラーム同盟の設立日とされる一〇月一六日にインドネシア・イスラーム運動の半世紀を祝う記念行事が開かれ、インドネシア・イスラーム同盟党の有力者ハルソノ・チョコクロアミノト *Harsono Tjokroaminoto* (チョコクロアミノトの息子) も出席している。翌年以降もこの日にはイスラーム勢力の一部によって記念行事が開催され、「民族覚醒の日」を一〇月一六日に変更すべくインドネシア政府に働きかけようという意見が出されるようになった。^⑤

サマンフデイの語りが重要性を持つようになった背景として指摘できるのが、インドネシア国内の政治的な対立の先鋭化である。一九五五年九月に、独立後最初の国民議会選挙が開かれ、イスラーム勢力に属するマシユミ党 *Partai Masjumi* とナフダトゥル・ウラマー *Nahdlatul Ulama*、世俗主義勢力に属するインドネシア国民党 *Partai Nasional Indonesia* とインドネシア共産党 *Partai Komunis Indonesia* が四大政党となった。国家のイデオロギーをめぐるイスラーム勢力

と世俗主義勢力が拮抗したことで、社会の分断が露わになった。^⑥この時期のイスラーム勢力の主流派は、政治的な汎イスラーム主義の理想は捨ててインドネシアという国民国家を承認しており、それをイスラームに基づいた国家とすることを目指していた。彼らの関心の対象は政党政治だけに限らず、社会の中にイスラーム的な価値観を広める試みがなされた。^⑦インドネシアの歴史における「民族覚醒」の起源をイスラーム（商業）同盟の誕生とすべきという主張も、同様の試みの一つと理解できる。

イスラーム勢力の中でサマンフデイの主張を熱心に支持したのが、いずれもマシユミ党に所属していた前述のタマル・ジャヤとハムカ Hamka（一九〇八—八二）であった。ハムカはタマル・ジャヤと同じく西スマトラ出身のジャーナリスト・作家であり、独立後の最も著名なイスラーム知識人の一人に数えられる。彼らの主張に関して注目すべきなのは、サマンフデイの語りにはなかった内容が付け加えられている点である。タマル・ジャヤの伝えたところでは、サマンフデイは自身がイスラーム（商業）同盟をブデイ・ウトモより先に結成したとしか述べていない。これに対しタマル・ジャヤとハムカが触れているのが、イスラーム（商業）同盟がブデイ・ウトモよりもナシヨナリスト団体として優れていたということである。ハムカは、イスラーム同盟の活動が大きく発展したのに比べ、「ブデイ・ウトモははるかに取り残されていた」と評している。^⑧他方のタマル・ジャヤの発言には揺らぎが見られ、一九五六年の論説では、イスラーム同盟とブデイ・ウトモの協力関係に言及したり、ワヒディンヤストモに敬意を示したりしていた。だが、翌年の論説では、「彼（サマンフデイ）の持った理想は、専ら貴族の子孫（turunan ningrat）の若者の学校と教育を發展させようとしただけのブデイ・ウトモの理想より大きかった」などと述べている。^⑩

ただし、サマンフデイの語りを受け入れたのは、イスラーム勢力の中でも一部に限られていた。なかでも、彼の語った内容を公に否定したのが、イスラーム学生協会 Himpunan Mahasiswa の会員であったドゥリアル・ヌルである。彼は後に研究者としてコーネル大学で博士の学位を取得する一方で、イスラーム政党の設立にも携わることになる。^⑪一九五七年

七月にマシユミ党系の新聞『ハリアン・アバディ Harian Abadi』に彼によるタマル・ジャヤ宛の反駁の論説が掲載されると、両者の間で論争が起こった。

ドウリアル・ヌルは、自分の目的が「歴史の真実 (kebenaran sejarah)」の追求であると断った上で、文書などの裏付けなしにサマンフデイの語りだけを根拠にイスラーム(商業)同盟の設立年を確定することはできないと論じる。¹²⁾ ましてやタマル・ジャヤが話を聞いた時のサマンフデイは高齢で心身ともに長らく病んでおり、その証言は信頼できるものではない。実はドウリアル・ヌルは、コーネル大学のインドネシア研究者ケイヒン George McTurran Kahn の依頼で、一九五五年半ばから五七年末にかけて二〇世紀のインドネシアにおけるイスラーム運動に関する調査を行っていた。¹³⁾ 定期刊行物などの文献とサマンフデイを含むイスラーム(商業)同盟の関係者からの聞き取りから得られた結論は、サマンフデイの語りを否定するものであった。ドウリアル・ヌルによれば、スラカルタのイスラーム商業同盟が設立された直接の要因は、辛亥革命の影響で華人の民族意識が高揚し、彼らとプリプミ(ジャワ人)との抗争が激化したことである。したがって、スラカルタのイスラーム商業同盟が一九一一年以前に設立されたということはありません。

これに対しタマル・ジャヤは、イスラーム同盟の設立過程について、サマンフデイの語り以外にも証拠があると反論している。¹⁴⁾ まず、サマンフデイから受け取った、執行部の役員一覧や一九〇八年の第一回大会の際に撮られた執行部の写真である。一九〇六年から一九一一年までの大会の議事録や団体の規約は存在しないが、彼によれば、それは当時の団体としては珍しいことではない。¹⁵⁾ さらにタマル・ジャヤは、イスラーム(商業)同盟の関係者の証言を裏付けとしてあげている。イスラーム(商業)同盟の古参の参加者で存命であったスワンディ Soewandi やラデン・グナワン Raden Gunawan は、サマンフデイの語った内容が正しいと認めたという。また、ハルソノ・チョクロアミノトは、イスラーム同盟の設立年とされる一九一一年は実際には植民地政庁から法人として認められた年だと語っていた。スラカルタのイスラーム商業同盟の結成の直接の要因とされるプリプミと華人の抗争にしても、辛亥革命以前から起こっていたとする。

しかしながら、ドゥリアル・ヌルにとって、タマル・ジャヤのあげた証拠はいずれも根拠が薄弱である。¹⁶まず、大会の議事録や規約がなくとも、同時代の定期刊行物がイスラーム（商業）同盟の活動を何も伝えていないのは不自然である。また、サマンフディの提示した執行部の役員一覧は、イスラーム同盟の設立メンバーについてこの団体の機関誌に掲載されたものと一致しておらず信憑性がない。大会の写真についても、ドゥリアル・ヌルは一九〇六年と一九〇七年と称するものをサマンフディに見せてもらったが、年代もイスラーム同盟の大会であることを示すものも写っていない。グナワンの証言は、出来事の順番が不自然であるし、スラカルタのイスラーム商業同盟の設立年に言及しているわけではない。ハルソノが言う一九一一年とは、イスラーム同盟が法人として承認された年ではなく最初の規約が作成された年であり、彼の知識も疑わしい。

むしろドゥリアル・ヌルが行った調査は、タマル・ジャヤの説明とは異なる結果を示している。実際には、グナワンもハルソノも、イスラーム商業同盟はまずバイテンゾルフで創設され、スラカルタのものはその支部であると認めており、グナワンはブディ・ウトモの方が先に設立されたと証言していた。また、ドゥリアル・ヌルがサマンフディに年月には触れずにイスラーム商業同盟の設立過程について尋ねたところ、辛亥革命の後にスラカルタのイスラーム商業同盟が設立されたとは彼は答えていた。チョクロアミノトライスラーム同盟の指導者たちの著作や講演の記録からも、スラカルタには最初にコン・シンがあり、それが分裂してサマンフディ率いるレクソ・ルメクソが設立され、バイテンゾルフのイスラーム商業同盟の支部となったと理解できる。そして、これらのことは、当時の『メダン・プリアイ』の記事から裏付けられる。ただし、ここで注意すべきなのは、ドゥリアル・ヌルもブディ・ウトモの誕生を「民族覚醒」の起源とすることには疑問を呈していることである。¹⁷彼によれば、この団体の活動範囲は初期の段階ではジャワ・マドゥラという一地域に限られており、地域的な団体であればブディ・ウトモより前から存在していたものもあった。その一方、イスラーム同盟の活動は地域の枠を超えてインドネシア全域に広まったのであるから、その役割はより高く評価すべきである。ドゥリアル・ヌ

ルは、ブデイ・ウトモに対する評価とイスラーム（商業）同盟の設立時期は別問題であるとしてそれ以上の議論は避けている。しかし、イスラーム勢力の中で、ブデイ・ウトモがナシヨナリズム運動の先駆者と見做されることへの不満が共有されていたことがうかがえる。

さて、以上の『アバデイ』紙での論争によって、イスラーム同盟の設立過程に関するサマンフデイ・タマル・ジャヤ説は、学術的な立場から完全に否定されたように思われる。ところが、この謬説はその後インドネシア社会に広まり続けることになる。その媒介となったのが、タマル・ジャヤのような大衆作家によって書かれた歴史関係の書籍である。なかでも、反植民地主義運動や独立運動で活躍した英雄たちの伝記作品は人気を博し、人々の歴史認識に少なからぬ影響を及ぼしてきた。これら作品には、著者の経験に基づく有益な情報を含むものもあるが、多くは史料的な裏付けが不十分な記述を含んでいる。^⑮イスラーム同盟の設立過程をめぐる謬説を取り上げているのは、タマル・ジャヤとソリヒン・サラム Solichin Salam である。^⑯特にタマル・ジャヤの『インドネシアの家宝』は英雄の伝記集の最初期のものとして知られ、オランダ植民地末期に初版が出版されると独立後も版を重ねていった。本書にサマンフデイの語った内容が取り入れられたのは、一九六六年出版の第六版からだと考えられる。それ以前の版では、イスラーム商業同盟は一九〇九年にティルトア ディスルヨによって設立され、一九一二年にスラカルタの支部がイスラーム同盟に改編されたと記されていた。^⑰これ以外にもタマル・ジャヤは、『インドネシアの偉人たち』や『インドネシアの英雄たち』といった伝記集を著し、イスラーム同盟の設立過程に関する謬説を取り上げ続けた。^⑱

これらの著作の中では、ドゥリアル・ヌルとの論争については何も言及されていない。インドネシアのナシヨナリズム運動がイスラーム（商業）同盟によって開始されたということは、タマル・ジャヤにとっては真偽を検証すべき事柄というより信念に基づいたものである。彼によれば、ヨーロッパ人の侵略に抵抗したスナン・グヌンジャティ Sunan Gunung-jati やディボストロ Diponegoro のように、インドネシアでは古い時代から「イスラーム共同体 (umat Islam)」が反植民

地主義運動の先駆者であった。²³したがって、インドネシアのナショナルリズム運動も「イスラーム共同体」が先駆者であつて然るべきなのである。ただし、タマル・ジャヤの議論では、イスラーム的ナショナルリスト史観はやや不明瞭である。

『インドネシアの家宝』第六版やそれ以降の伝記集には、一九五〇年代半ばの論説で認められたブディ・ウトモへの批判的な論調が認められなくなっている。ワヒディンやストモも英雄として取り上げられ、ワヒディンは「民族運動の父（bapa pergerakan Nasional）」と呼ばれている。²⁴

① “Hadji Samanhudi Meninggal Dunia,” 36.

② “PSII dari Tahun ke Tahun,” *Bendera Islam* 1/1 (August 3, 1954): 3.

③ 『ブンデラ・イスラム』の一面には、チヨクロアミノトの功績に関する記事が頻繁に掲載されていた。例えば、“Almarhum H.O.S. Tyokroaminoto Adalah Seorang Religius, Socialis dan Nasionalis,” *Bendera Islam* 1 (September 15, 1954): 1. “Almarhum H.O.S. Tyokroaminoto Adalah Pendobrak Pintu Kemerdekaan Indonesia! Majlis Taklim (Kongres) PSII ke-30 di Solo Berakhir dengan Baik,” *Bendera Islam* 18 (April 15, 1955): 1.

④ “Mengenangkan 16 Oktober 1905,” *Gema Pemuda Al-Irsyad* 2/7 (October 1955): 6-7.

⑤ “Hadji Samanhudi Meninggal Dunia,” 43.

⑥ Herbert Feith, *The Decline of Constitutional Democracy in Indonesia*, Ithaca, New York: Cornell University Press, 1962, p. 434. トン・ユン党は、イスラーム諸勢力を統合する政党として一九四五年一月に発足した。インドネシア・イスラーム同盟党とナフダトゥル・ウラマーも結成に参加したが、前者は一九四七年に、後者は一九五二年に離脱して独自の政党となった。なお、イスラーム同盟党は一九五五年

の選挙では僅かな票しか獲得できなかった。

⑦ 社会の中にイスラーム的な価値観を広めようとした同時期の動きとして、ジャワイ (Jawi, ムラユ語のアラビア文字表記) を復活させようとした議論があげられる。これについては、山口元樹「イスラームの文字、マレーの文字——独立期インドネシアにおけるジャワイ復活論とマラヤとの関係」『東南アジア研究』五八巻二号、一四一—一六三頁を参照された。

⑧ ハムカに「*James R. Rush, Hamka's Great Story: A Master Writer's Vision of Islam for Modern Indonesia*, Madison, WI: The University of Wisconsin Press, 2016.

⑨ “Pemimpin-pemimpin Kita,” *Suara Masyumi* 12:8-9 (June 1, 1957): 7.

⑩ “Peringatan 51 Tahun Pergerakan Islam Indonesia 16 Oktober 1905 16 Oktober 1956,” *Suara Masyumi* 28-29 (October 20, 1956): 3. “Hadji Samanhudi Meninggal Dunia,” 36.

⑪ ヌハリアル・モルの経歴に「*James R. Rush, Hamka's Great Story: A Master Writer's Vision of Islam for Modern Indonesia*, Madison, WI: The University of Wisconsin Press, 2016.

⑫ “Kapan Tgl Pendidikan Serikat Dagang Islam Jg Pasti? Penting Dis-elidiki dengan Teliti untuk Kepentingan Kebenaran Sejarah,” *Hari-*

an Abadi (July 17, 1957): 3.

¹³ Kahin, "In Memoriam," 104-105. ただし、ドゥリアル・ヌルは、オランダ植民地政庁の公文書は史料としてあげていない。

¹⁴ "Tanggal Pendirian SDI Sebagai Permulaan Kebangunan Pengerakan Nasional."

¹⁵ タマル・ジャヤの話には矛盾点が多い。例えば、サマンフディから受け取った最初の大会の写真は、彼の語りに従えば一九〇六年のものと述べなければならない。また、通説ではイスラーム同盟の最初の大会は一九一三年に開催されたのであるから、大会の議事録がないのは一九一二年からである。

¹⁶ "Tgl. Pendirian Ser. Dagang Islam: Dalil2 Menetapkan Tahun 1905 dari T. Djaja Lemah I-III," *Harian Abadi* (September 12, 1957): 3; (September 13, 1957): 3; (September 16, 1957): 3. なお、ドゥリアル・ヌルはタマル・ジャヤがあげた人物のうち、サマンフディには会っていない。

¹⁷ "Tgl. Pendirian Ser. Dagang Islam: Dalil2 Menetapkan Tahun 1905 dari T. Djaja Lemah II."

¹⁸ Klooster, *Indonesiers*, pp. 138-141.

¹⁹ ソリビン・サラムの経歴や著作については、Solichin Salam, *60 Tahun Solichin Salam: 17 Oktober 1933 - 17 Oktober 1993*, s.n. ただし、彼の著作には、一九〇五年に結成されたイスラーム商業同盟が一九一二年にイスラーム同盟に改編されたとしているものもあるが、別の著作では、スラカルタのイスラーム商業同盟の設立は一九一一年とされ、脚注でサマンフディの語った内容があげられている。Solichin Salam, *Sedjarah Islam di Djawa*, Jakarta: Djajamurni, 1964, p. 62; id., *Hadji Agus Salim: Pahlawan Nasional*, Jakarta: Djajamurni, 1965,

p. 75.

²⁰ Tamar Djaja, *Pustaka Indonesia: Orang-orang Besar Tanah Air*, 4th ed., Jakarta: Kementerian Pendidikan Pengajaran dan Kebudayaan Republik Indonesia, 1951, p. 144; id., *Pustaka Indonesia: Riwayat Hidup Orang-orang Besar Tanah Air*, 6th ed., vol. 2, Jakarta: Bulan Bintang, 1966. 筆者が現物を確認できたのは第四版と第六版のみ。第四版と第五版は出版社が異なるだけで同じ年に出ており、内容に大きな変更はないと思われる。

²¹ Tamar Djaja, *Orang-orang Besar Indonesia*, vol. 2, Jakarta: Pustaka Antara, 1975, pp. 59-66; id., *Pahlawan-pahlawan Indonesia*, vol. 2, Jakarta: Pustaka Antara, 1979, pp. 59-66. 後者は前者の増補版である。

²² スナン・グスマンジャティは、一五世紀後半から一六世紀後半のジャワにおいてイスラームの布教に尽力したとされる半ば伝説的なワリ・ソント Wai Songgo (九聖人) の一人と見做される人物。一五二七年にポルトガル艦隊を撃破し、西ジャワのチルボンに国家を樹立した。ディボスゴロは、中部ジャワ南部のイスラーム王国マタラムの王族で一八二五年から三〇年に起こったジャワ戦争で反オランダ武力抵抗を指導した。

²³ "Tanggal Pendirian SDI Sebagai Permulaan Kebangunan Pengerakan Nasional."

²⁴ Djaja, *Pustaka Indonesia*, vol. 2, pp. 608-617; id., *Orang-orang Besar*, vol. 2, pp. 7-16, vol. 3, pp. 65-72; id., *Pahlawan-pahlawan*, vol. 2, pp. 7-16, vol. 3, pp. 52-58. サマンフディがイスラーム同盟の設立過程をめぐる語りを始める前に出版された『インドネシアの家宝』の第四版にも、フディ・ウツモへの批判的な論調は認められない。

三 公的な歴史叙述の形成と謬説の扱い

1 国史セミナーと『インドネシア国史』

イスラーム同盟の設立過程をめぐる謬説は、インドネシアの公的な歴史叙述が形成されていく中でどのように扱われてきたのであろうか。植民地時代の歴史叙述は、オランダ人の手による彼らを主体としたオランダ中心史観に沿ったものであった。これに代えてインドネシア人を主体とした歴史を創出すべきという考えは、独立運動の中で生まれ、発展していった。インドネシア人の手による近代的な歴史学の方法に基づいた国史編纂の計画は独立直後に始まるが、実現に至るまでには長い時間がかかった。一九五七年に教育文化省の呼びかけで、中部ジャワのジョクジャカルタで第一回国史セミナーが開催された。その中で議題となったのは、インドネシア中心主義の歴史観を構築するための歴史哲学や時代区分などであり、個別の事例研究の報告はなく、イスラーム的ナショナリスト史観も話題となっていない。

このセミナーで大きな争点となったのが、ナショナリスト史観と近代的な歴史学との相克である。当時は反植民地主義の風潮を背景としたナショナリスト史観が支配的であり、その代表的な主唱者が教育文化大臣も務めたムハンマド・ヤミン Muhammad Yamin であった^①。彼は、シュリーヴィジャヤやマジャパヒトといった仏教・ヒンドゥー教の王国がインドネシア民族の統一国家であると唱え、民族意識の醸成を目的としたロマン主義的な歴史書を執筆した。だが、そのような著作はしばしば非実証的であったため、近代的な歴史学の立場をとる者たちからは批判を浴びることとなった。第一回国史セミナーでは、国史編纂に向けてナショナリズムに基づいた歴史解釈の必要性を訴えたヤミンに対し、参加者の一人であったスジャトモコ Soedjatmoko はナショナリスト史観と科学的な歴史学とは基準が相いれないと反論した^②。

イスラーム同盟の設立過程を扱った報告がなされたのは、一九七〇年に再びジョクジャカルタで開催された第二回国史

セミナーにおいてであった。この間、マシユミ党は指導者が地方反乱に参加したために一九六〇年に非合法化され、スハルト政権移行後も復活を認められなかった。しかし、社会の中にイスラーム的な価値観を広めようとする試みが断念されたわけではなかった。第二回国史セミナーでは、第一回の際とは異なり個別事例を扱った報告が増加した。それらの中で、アフマド・マンスル・スルヤヌガラ Ahmad Mansur Suryanegara とヤフヤ・ディムヤティ Yahya Dinyati が、イスラーム商業同盟が一九〇五年一月一六日に設立されたという説を取り上げた^③。スルヤヌガラはバンドウンのパジャジャラン大学に所属する歴史研究者であったが、イスラーム団体でも活動し、旧マシユミ党の指導者と近い関係にあった^④。

スルヤヌガラとディムヤティは、イスラーム商業同盟の設立時期についてタマル・ジャヤやソリヒン・サラムの著作を典拠にあげている^⑤。彼らの報告の重要な点は、まず、イスラーム的なシヨナリスト史観が学術的な装いをとるようになったことである。二人の報告者は自説の補強のために、オランダ人の歴史研究者フレケ Bernard H. M. Vlekke の著作を引用している^⑥。フレケによれば、オランダ植民地政庁は反植民地主義運動に関する報告書にあまり注意を払っていなかったとされる。スルヤヌガラとディムヤティは、イスラーム商業同盟の存在が華人とジャワ人の抗争が激化するまで植民地政庁に認識されなかったのはそのためだと結論付けている。しかし、彼らは一次史料を検討しているわけではなく、ドウリアル・ヌルによるタマル・ジャヤへの反駁にも言及していない^⑦。

さらに重要なのは、タマル・ジャヤのものと比べ、スルヤヌガラとディムヤティの主張にはイスラーム的なシヨナリスト史観がより明確に示されている点である。いずれの報告者も、イスラームが多数派住民の宗教としてインドネシア社会に根付いており、ヨーロッパ人による植民地支配への抵抗の原理として、そしてナシヨナリズムの形成と独立運動の展開において決定的な役割を果たしたとする論を展開している。特にスルヤヌガラは、ブディ・ウトモへの批判を議論の中心に据えており、非イスラーム的もしくは反イスラーム的なジャワ主義を掲げたせいで指導者たちの離反を招き、大衆の支持も得られなかったなどと記している。そして、ここでも学術的な装いとして、自説の裏付けのために前述のケイヒンの

研究が度々引用されている。^⑧

スルヤヌガラとディムヤティは、公的な歴史においてイスラーム商業同盟の誕生を「民族覚醒」の起源として認めるよう求めた。^⑨しかし、この要求が受け入れられることはなかった。インドネシア国史編纂の計画は、一九七五年の『インドネシア国史』の出版をもって一先ずは達成された。その第五巻の「民族運動 Pergerakan Nasional」の記述は一九〇八年のブディ・ウトモの設立から始められ、イスラーム同盟は一九一一年にスラカルタで結成されたと書かれている。^⑩ブディ・ウトモについては、初期の会員資格がジャワ人に制限されていたことなどが指摘され、大衆的な支持を得ることはなく政治的な重要性は高くなかったと評価されている。その一方、「しかしブディ・ウトモの重要な一つの事柄は、その体内に最初の民族的な精神の萌芽が既に存在したことであり、そのため民族運動の祖と見做され、…」とあり、最初のナシヨナリスト団体としての重要性は決して否定されていない。^⑪

イスラーム同盟の設立過程をめぐる謬説が『インドネシア国史』に受け入れられなかったのは当然と言える。なぜなら、本書の総括責任者を務めたサルトノ・カルトディルジ Sartono Kartodirdjo は、この団体に関して史料に依拠した研究を行っていたからである。彼はイェール大学とアムステルダム大学で学位を取得しガジャマダ大学で教鞭を執った歴史研究者である。彼とその弟子たちからなるサルトノ学派は、インドネシアの歴史学会で長きにわたって強い影響力を持ち続けた。そのこともあり、これ以降出版された公的な歴史書にも、サマンフディ・タマル・ジャヤ説の入り込む余地はなかった。国史編纂の目的の一つは、統一された歴史教育を実施するための指針となる標準テキストの作成であった。その後出版された中学校や高等学校の歴史の教科書は、『インドネシア国史』に準拠している。^⑬一九八〇年には、教育文化省からサマンフディの伝記が発行された。その中では、イスラーム商業同盟の設立過程について研究者間で見解の相違があることには触れられている。だが、結論としてはサルトノの研究に従い、サマンフディの設立したスラカルタのイスラーム商業同盟がバイテンゾルフのものの支部であることは確実であろうと記している。^⑭

公的な歴史書に準じるものでイスラーム勢力寄りの記述をとった歴史書として、一九九一年にインドネシア・ウラマー評議会 Majelis Ulama Indonesia (MUI) が発行した『インドネシア・イスラーム共同体の歴史』があげられる。¹⁵⁾ MUI は、一九七五年にスハルトの主導で創設された組織で、初代議長を務めたのはハムカであった。スハルト政権下でイスラーム勢力の政治活動は徹底的に抑圧されたが、宗教行政の円滑化や開発政策の正当化のためにイスラーム知識人の協力が必要とされた。MUI は、政府とイスラーム勢力との間の仲介役となることが期待された組織でありながら、政府からは一定の独立性を持っていた。¹⁶⁾ 『インドネシア・イスラーム共同体の歴史』の編纂は、編者のタウフィック・アブドゥッラー Taufik Abdullah をはじめとする歴史研究者に委ねられた。タウフィック・アブドゥッラーはコーネル大学で博士号を取った研究者であり、イスラーム運動に関する彼の研究はインドネシア内外で学術的に高く評価されてきた。ただし、興味深いことに、第二回国史セミナーの報告者であるスルヤヌガラも、執筆者の一人として参加している。

『インドネシア・イスラーム共同体の歴史』の出版の意図は、『インドネシア国史』のものとは異なるイスラーム勢力の歴史観を示すことにあったとされる。¹⁷⁾ それが特に反映されているのが、イスラームのインドネシアへの到来と初期のイスラーム化された王国に関する記述である。ハムカをはじめとするイスラーム知識人の一部は、ヤミンのものに代表されるナシヨナリスト史観においてイスラーム化以前の王国、特にマジヤパヒトがインドネシア人の民族意識の基盤として重視されることに不満を抱いていた。彼らはセミナーなどを開催し、インドネシア史におけるイスラームの位置付けを見直すべく、この地に早い時期に「正統」なイスラームが到来したと主張していた。¹⁸⁾ 『インドネシア・イスラーム共同体の歴史』でも、イスラームの誕生後間もなくアラブ人ムスリムがこの地域を訪れ、九世紀半ばにイスラーム化した王国が建設されていた可能性などが取り上げられている。

しかしながら、本書でさえ、イスラーム同盟の設立過程については標準的な記述に従っている。すなわち、イスラーム商業同盟は一九〇九年にティルトアデイスルヨによって創設され、一九一一年にイスラーム同盟に改編されたと記されて

いるのである。この箇所に付された註では、文献とインタヴュー調査に基づいたものとしてドゥリアル・ヌルの研究などが典拠としてあげられている。サマンフディ・タマル・ジャヤ説も言及されているが、「インドネシア・イスラーム同盟の活動家」が主張しているものとのみ述べられている。イスラーム勢力の意向がある程度反映された歴史書においてすら、この謬説は否定されたのである。

2 存続する謬説

スルヤヌガラにとって、『インドネシア・イスラーム共同体の歴史』の記述は明らかに不本意なものであった。彼は定期刊行物の論説やセミナーにおいて自説を唱え続け、一九九五年にはそれらをまとめて『歴史を発見する——講義インドネシアのイスラーム運動』として出版した。その中では、第二回国史セミナーにおけるイスラーム商業同盟の設立過程とブディ・ウトモに関する彼の主張も取り上げられている。^⑩ サマンフディ・タマル・ジャヤ説は公的な歴史叙述からは排除されたが、出版市場では生き残り続けていった。サルトノ学派の影響力は歴史学界では大きかったかもしれないが、一般的な書籍にまで及ぶようなものではなかった。^⑪ また、一九八〇年代末以降のインドネシアでは、大学キャンパスにおけるイスラーム宣教運動の発展と連動してイスラーム関連書籍の出版市場が急速に拡大していった。スルヤヌガラは、イスラーム系の大手出版社の一つミザン社から出された。^⑫

スルヤヌガラは著作で議論を呼んだのが、民主化後の二〇〇九年に出版された大部な『歴史の炎』である。^⑬ 本書は前作と重複する内容が多く、イスラーム（商業）同盟やブディ・ウトモに関する主張も、大筋としてはそれまでのものの繰り返しである。しかし、『歴史の炎』は、極端とも言えるイスラーム的ナショナリスト史観に基づいてこれらの団体の記述に歪曲された説明を加え、もはやサマンフディ・タマル・ジャヤ説とも異なったものとなっている。それらの歪曲された記述が映しているのは、イスラームを敵視するオランダの植民地主義政策にあらゆる事柄を結び付けようとする陰謀論的

な歴史観である。

『歴史の炎』では、「民族覚醒」の起源について以下のように述べられている。まず「一部の研究者」がイスラーム同盟の設立を一九一二年としている理由を、オランダ中心史観に立つコーレイン Hendrikus Colijn の著作が参照されてきたためとする²⁶。しかし、定評のある研究の中で、イスラーム同盟の設立過程に関してこの著作を典拠としているものは見当たらない。また、スラカルタでイスラーム同盟が設立された直接の要因と考えられるブリブミと華人との抗争は、オランダ植民地政庁が仕込んだものと説明されている。ブディ・ウトモについても、アラブ系のイスラーム団体ジャムイーヤト・ハイル Jam'iyyat Khayr に対抗させるために植民地政庁が作った団体であるとする解釈が示され、それゆえイスラームを敵視し、インドネシア・ナショナリズムにも反対したのだという²⁶。さらにスルヤヌガラは、ティルトアデイスルヨのイスラーム商業同盟までも、サマンフディの同名の団体に対抗させるべく植民地政庁が設立した団体であると主張する。ティルトアデイスルヨとオランダ人や現地人の官吏との近い関係が過度に強調され、彼が植民地政庁から支援を受けていたというのである²⁶。ティルトアデイスルヨとサマンフディの団体を別のものとした意図は、イスラーム商業同盟が一九〇九年に設立されたという事実とそれが一九〇五年に設立されたとする謬説とに整合性を付けることにあつたと推察される。もちろん、上記の解釈はいずれも史料に基づいたものではなく、学術的に評価のある研究の記述とも一致しない。

ところが、基本的にこれまでの主張の繰り返しであり、歪曲された記述に満たされているにも拘らず、『歴史の炎』はインドネシア社会の中で一定の反響を呼んでいる。そのことを示す例として、二〇一一年出版の高等学校用の教科書『インドネシア国史——新たな視点』があげられる。本書では、イスラーム同盟の設立過程やブディ・ウトモとティルトアデイスルヨのイスラーム商業同盟に関して、基本的に『歴史の炎』に則った記述がなされている²⁷。そして「民族覚醒の日」についても、スルヤヌガラの見解を引用し、ブディ・ウトモではなくイスラーム（商業）同盟の設立日とすべきと唱えられている²⁸。それ以外の点でも、インドネシアの国民統合の基盤としてヒンドゥー・仏教的要素でなくイスラーム的要素

を強調したり、世俗主義、共産主義、自由主義といった「反イスラーム的」な思想の導入をヨーロッパ人の植民地主義と結び付けたりするなど、この教科書は『歴史の炎』と同じく極端なイスラーム的ナショナリスト史観をとっている。

この教科書の作成を主導したのは、インドネシア・イスラーム宣教協議会 Dewan Dakwa Islamiyah Indonesia (DDII) である。DDIIは、旧マシユミ党の指導者によつて一九六七年に結成された団体で、教育・出版など社会活動を通じてインドネシアのムスリムの啓蒙のために活動している。編者を務めたティアル・アンワル・バフティアル Tiar Anwar Bachtiar はインドネシア大学で博士号を取得した歴史研究者であるが、イスラーム団体のブルシス Petrus (イスラーム統一協会) でも活動している。彼はスルヤヌガラ『歴史の炎』について、最新の研究を参照せず、信憑性の低い情報をあげている点など「方法的な問題」があると指摘している。だが、従来のインドネシアの公的な歴史叙述は世俗的であり、国民国家や民族の形成の基盤としてイスラーム的要素を強調すること、すなわち「インドネシア史のイスラーム化」の必要性がある点で、彼はスルヤヌガラに賛同している。³¹⁾

このような偏った内容の教科書は一部の高等学校でしか使用されていないと考えられる。³²⁾ だが、スルヤヌガラやバフティアルの歴史観が、現在のインドネシア社会の一部から支持を得ていることは確かである。それを示しているのが、オンラインを中心に活動している「民族のためのイスラームの足跡 [Jejak Islam untuk Bangsa] (JIB)」という歴史愛好家グループの存在である。二〇一三年に設立されたJIBのメンバーは、とりわけイスラームとナショナリズムの関係に関心を示し、公的な歴史叙述は誤っており、イスラームがインドネシア民族に果たした役割の記述が不足していると唱えている。彼らは歴史の専門家に指導を委ねており、その一人が前述の教科書の編者バフティアルである。このグループのウェブサイトには、イスラーム的ナショナリスト史観に則った記事が掲載され、イスラーム同盟の設立過程に関する謬説やブダイ・ウトモの設立を「民族覚醒」の起源とすることを疑問視する主張などが述べられている。³³⁾

インドネシア社会の中でイスラーム的ナショナリスト史観が支持を得ている背景には、スハルト政権崩壊後に既存の歴

史叙述の見直しが活発になったことがある。多くの批判が向けられてきたのが、新秩序時代に政権の正当化のために歪曲された記述である。さらに、バンバン・プルワント Bambang Purwanto をはじめ一部のインドネシア人歴史研究者は、現在まで支配的であるインドネシア中心主義のナショナリスト史観も、もはや歴史学の要求に答えられないと論じている。³⁴例えば、ナショナリスト史観では、特定の偉人や事件によって歴史に変化がもたらされたと説明されがちであった。これに対し、一般の人々の社会生活に焦点を当てた手法をとる必要性が唱えられている。政治的には中立で学術的な歴史を標榜したサルトノ学派でさえ、国民国家内部のダイナミズムを単純化したり、反植民地主義と安易に結び付けた解釈を示したりしてきた点でインドネシア中心主義に陥っていると指摘される。だが、学術的に意義のある議論を試みる者がいる一方で、深い考察もなくただ既存の歴史叙述を拒絶さえすればいいという安易な考えも認められる。これに加え、二〇〇〇年代半ば以降のインドネシアでは、イスラームの「保守化」³⁵傾向、さらにこの宗教の信奉者に特権的な地位を要求する「多数派主義」の動きも認められるようになった。これらの要因を背景に、イスラーム的ナショナリスト史観が脚光を浴びるようになったものと推察される。³⁶そして、イスラーム（商業）同盟がブデイ・ウトモより先に創設されたという、繰り返し否定されてきた謬説までもが取り上げられるようになったのである。

このような風潮を受け、国史セミナーにおいてさえ「インドネシア史のイスラーム化」の動きを肯定する報告がなされた。二〇一八年にジョクジャカルタで開催されたセミナーでは、「インドネシアにおける歴史教育の新しいパラダイムと方向性」というテーマが掲げられた。報告者の一人でガジャマダ大学のヌルッディン・アル・アクバル Nuruddin Al Akbar は、JIB の活動を紹介し、SNS など新しい手法を使って若者の「歴史リテラシー」の向上を目指している点や既存の歴史叙述を批判的に捉えている点について好意的に論じている。しかし、この「歴史リテラシー」には史料批判の必要性は含まれていないようであり、イスラーム的ナショナリスト史観による記述の偏向や事実の歪曲は見過ごされてしまっている。³⁷

もちろん、学術的な立場をとるインドネシア人歴史研究者は、歴史叙述の見直しの必要性を訴えながらも、「インドネシア史のイスラーム化」の動きには同意していない。本稿の冒頭で言及したアグス・スウィグニョは、アムステルダム大学とライデン大学でそれぞれ修士と博士の学位を取得し、ガジャマダ大学で教鞭を執る歴史研究者である。スウィグニョによれば、『歴史の炎』や『インドネシア国史——新たな視点』が依拠するイスラーム的ナショナリスト史観、彼の言うイスラーム中心主義の歴史観は、インドネシアやインドネシア人のアイデンティティの形成に寄与してきたイスラーム以外の諸要素を認めていない。その点で、この歴史観はインドネシア中心主義をはじめとするあらゆる「中心主義」の歴史観と同じ過ちを繰り返している。特定の間人集団に歴史における中心的作用を与えることは、植民地時代のオランダ中心主義から続く、歴史を政治の道具とする方法に他ならないと彼は警告する。^③

インドネシア科学院（LIPRI）の首席研究員であったアスヴィ・ワルマン・アダム Asvi Warman Adam^④、「インドネシア史のイスラーム化」の動きに批判的である。アスヴィはガジャマダ大学とインドネシア大学でフランス文学を学んだ後、フランスの社会科学高等研究院で歴史学の博士号を取得している。彼の文筆活動は、インドネシア近現代史、特にスハルト体制下で歪められた歴史叙述を問い直すことに向けられてきた。しかし、同じく歴史叙述の見直しを訴えているスルヤスガラ^⑤の『歴史の炎』は、文献を批判的に検討しておらず、アスヴィから見れば歴史研究としてあるべき水準を満たしているとは言えない^⑥。イスラーム的ナショナリスト史観に対しては、アラブ地域だけでなくインド、中国、ヨーロッパといった他の大文明からの影響も勘案した上で、インドネシア人のアイデンティティは、イスラームだけではなく重層的なものと理解すべきであると指摘する。アスヴィは、インドネシアにおける「イスラームの歴史を真つすぐに正すこと」、すなわちイスラームの位置付けを見直す必要性は認めている。しかし、それは、スハルト時代に政府の工作が疑われる事件によってイスラームが過激派と結び付けられ、歴史研究の中でもそのイメージが歪められてきたためである。

アスヴィは著作の中で、イスラーム同盟の設立過程や「民族覚醒」の論点に直接言及している^⑦。まず、イスラーム同盟

の設立過程をめぐる謬説については、ドゥリアル・ヌラらによって論駁されているとして彼は完全に退けている^②。また、ブデイ・ウトモの評価についても、反イスラーム的な要素は見い出せないとしたり、インドネシア・ナショナリズムを促進し、政治性も帯びていたとしたりする見解もあると述べている。そもそもアスヴィは「民族覚醒」の起源をある一つの団体の誕生に帰する考え方に異議を唱えている。確かにブデイ・ウトモの会員はジャワ人に制限されていたが、イスラーム同盟も非ムスリムを受け入れておらず、その結成はインドネシア民族の「覚醒」という条件を完全には満たしていない。アスヴィは、「民族覚醒」というものは、静的な歴史的事件としてではなく、ブデイ・ウトモやイスラーム同盟以降に登場した団体の活動も考慮した、動的なプロセスとして捉えるべきであると唱えている。

スウィグニョとアスヴィの指摘は、いずれも歴史叙述の方法に関して意義のあるものである。ただし、彼らによる「インドネシア史のイスラーム化」に対する批判の中で十分に論じられていないのが、インドネシア中心主義の問題である。特にスウィグニョはプルワントらと同じくインドネシア中心主義の克服を訴えているが、イスラーム的ナショナリスト史観が既存のナショナリスト史観と異なるという点を強調し過ぎていて、イスラーム的ナショナリスト史観は、インドネシア史の中のイスラーム的要素に中心的な役割を与えるものであるが、ナショナリズムの形成と独立運動の展開を主題とし、結局は国民国家の存立の承認を論じている。この点において、この歴史観は旧来のインドネシア中心主義と同じ枠組みをとっているのである。

- ① ヤミンの生涯については、フアジャール・イブヌ・トゥファイル（荒木亮訳）「偉大なるインドネシアという理想——ムハマッド・ヤミン、タラウイの村からジャワの宮廷まで」山口・金子・津田（編著）『国家英雄』、一八三—二二頁。

- ② 鈴木「あるべき歴史像を求めて」、一九七—九八頁；Curaning, "Towards Reinventing" スジャトモコは「ジャーナリスト・政治家・

- 社会学者として活躍した知識人。一九六四年に出版された『インドネシア歴史学方法入門 *An Introduction to Indonesian Historiography*』の編者。

- ③ Achmad Mansur. *Benarlah 20 Mei sebagai Hari Kebangkitan Nasional; Paper pada Seminar Sejarah Nasional ke-2*, tg. 26-29 Agustus 1970 di Jogjakarta, s.n. 1970. Yabya Dimiyati. *Pernanan Sarekat Is-*

lam dalam Menemukan Kesadaran Nasional di Indonesia: Paper pada Seminar Sejarah Nasional ke-2, tg. 26-29 Agustus 1970 di Jogjakarta, s.n.

- ④ Tiar Anwar Bachtiar, "Islamisasi Penulisan Sejarah: Survey Gagasan Hamka dan Ahmad Mansur Suryanegara," *Jurnal Sejarah Peradaban Islam* 2/2 (2018): 14. マウナーの報告書には、Achmad Mansur を表記している。ヤフヤ・ディムヤティについては、所在地がバンジャレンと記されている以外の詳細は不明。

- ⑤ Mansur, *Benarlah 20 Mei*, p. 19; Dimiyati, *Pernah Srekat Islam*, p. 12. ただし、イスラーム同盟の改編時期については、ディムヤティは一九二二年で、スルヤスガラは特に言及せず、一九二二年とマウナーの説明をあげているのみである。

- ⑥ 彼らがあげた文獻は、Bernard H. M. Vlekke, *Nusantara: A History of Indonesia*, revised ed., Bruxelles: Les Edition A. Manteau S.A., 1961.

- ⑦ このセミナーにはチャリアル・スルも報告者として参加しているが、イスラーム同盟の設立過程については言及していない。セミナーの中で、彼とスルヤスガラやディムヤティとの間でどのような議論がなされたのかは不明。

- ⑧ スルヤスガラが引用しているのは、George McTurnan Kahin, *Nationalism and Revolution in Indonesia*, Ithaca, New York: Cornell University Press, 1963.

- ⑨ Mansur, *Benarlah 20 Mei*, p. 16; Dimiyati, *Pernah Srekat Islam*, pp. 23-24.

- ⑩ Yusmar Basri (ed.), *Sejarah Nasional Indonesia V: Jaman Kebangkitan Nasional dan Masa Akhir Hindia Belanda*, Jakarta: Balai Pustaka, 1975, pp. 181, 187, 300. なお、本書ではイスラーム商業同盟について

ては設立年は明記されず、ティルトア・デイスルヨがサマンフディとともにスラカルタのイスラーム商業同盟の形成に役割を果たしたと記されている。筆者は『インドネシア国史』の二〇一九年版まで確認したが、該当部分の記述内容に変更はない。

- ⑪ Basri (ed.), *Sejarah Nasional Indonesia V*, p. 187.

- ⑫ Sartono Kartodirdjo, *Protest Movements in Rural Java: A Study of Agrarian Unrest in the Nineteenth and Early Twentieth Centuries*, Singapore and New York: Oxford University Press, 1973, id. (ed.), *Sarekat Islam Lokal*, Jakarta: Arsip Nasional, 1975.

- ⑬ 鈴木「ゆきぞの歴史像をめぐって」一九六頁。

- ⑭ Mujiono and Sutrisno Kutoyo, *Haji Samanhudi*, Jakarta: Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Pusat Penelitian Sejarah dan Budaya, Proyek Inventarisasi dan Dokumentasi Sejarah Nasional, 1980, pp. 40, 56.

- ⑮ Taufik Abdullah (ed.), *Sejarah Ummat Islam Indonesia*, Jakarta: Majelis Ulama Indonesia, 1991.

- ⑯ MU については、小林寧子『インドネシア——展開するイスラーム』名古屋大学出版会、二〇〇八年、九章。

- ⑰ 以下の内容は、Wood, *Official History*, ch. 4 に基づく。

- ⑱ ハムカラがイスラームのインドネシアへの到来の時期や経路に拘った背景には、インドネシア人歴史研究者の中に、インドネシアのイスラームは中国からもたらされたもの、すなわち「正統」ではなものであると主張する者がいたこともあげられる。Klooster, *Indonesiers*, pp. 132-133.

- ⑲ Ahmad Mansur Suryanegara, *Menemukan Sejarah: Wacana Pengerahan Islam di Indonesia*, Bandung: Mizan, 1995, ch. 4.

- ⑳ Curaming, "Towards Reinventing."

²¹ 見市建「新興大国インドネシアの宗教市場と政治」NTT出版、二〇一四年、第二章。

²² Ahmad Mansur Suryanegara, *Api Sejarah*, Bandung: Salamadani, 2009. 二〇一七年には『歴史の炎』の第二巻も出版されている。

²³ Suryanegara, *Api Sejarah*, p. 373. スルヤネガラがあげているのは Hendrikus Colijn, *Koloniale vraagstukken van heden en morgen*, Amsterdam: De Standard, 1928.

²⁴ Suryanegara, *Api Sejarah*, pp. 360–61.

²⁵ Suryanegara, *Api Sejarah*, pp. 344–46. ジャムニーヤー・ハイルはアラブ系住民にまつ一九〇五年（もしくは一九〇一年）にバタヴィアで設立されたイスラーム系の社会団体。

²⁶ Suryanegara, *Api Sejarah*, pp. 351–357. ティルトアディスルヨが歴史役として描かれている理由は明示されていない。だが、著名なインデネシア人作家プラムディ・アナンタ・トゥール Pramodya Ananta Toer が彼を評価をしたことには無縁ではないと思われる。プラムディは共産党系の文化団体で活動した左派の知識人であり、一九六〇年代前半にハムカの作品を公に批判していた。Rush, *Hamka's Great Story*, p. 138.

²⁷ Tiar Anwar Bachtiar (ed.), *Sejarah Nasional Indonesia: Perspektif Baru, untuk SMA/MA/SMK/Sebelumnya*, vol. 2, Jakarta: Andalusia Islamic Education & Management Services, 2011, pp. 126–129. この教科書の概要にのぞくと、Suwignyo, “Indonesian National History Textbooks after the New Order,” 126–128. ただしこの教科書ではイスラーム同盟は一九二二年に設立されたと記されている。

²⁸ Bachtiar (ed.), *Sejarah Nasional Indonesia*, pp. 158–166.

²⁹ Bachtiar (ed.), *Sejarah Nasional Indonesia*, vi–vii. ブルハスは一九二三年にバン둥ンで結成されたイスラーム系の社会団体であり、指導

者を輩出するなどインミニ党と関係が深い。

³⁰ Bachtiar, “Islamisasi Penulisan,” 146–152.

³¹ Suwignyo, “Indonesian National History Textbooks after the New Order.”

³² ーイロの活動にのぞくと、Nuruddin Al Akbar, “Menolak Lupa: Gerakan Literasi Sejarah ala Komunitas Jejak Islam untuk Bangsa (JIB),” in Uji Nugroho Winardi (ed.), *Sejarah, Seni dan Komunitas Kesejarahan*, Jakarta: Direktorat Sejarah, Direktorat Jenderal Kebudayaan, Kementerian Pendidikan dan Kebudayaan, 2019, pp. 238–261.

³³ <https://jejakislam.net/hari-hari-terakhir-hadi-samanhoodi-pejuang-yang-terdilupkan/> 及び https://jejakislam.net/kebangkitan-nasional-budi-utomo-atau-sarekat-islam/#_ednref12 (二〇二四年九月五日閲覧)

³⁴ Curaming, “Towards Reinventing,” van Klinken, “The Battle,” Suwignyo “Indonesian National History,” 115. マン・ブルフメント・ガジヤマタ大学の研究者。ロンドン大学東洋アフリカ学院 (SOAS) の歴史学の博士号を取得している。

³⁵ Martin van Bruinessen (ed.), *Contemporary Developments in Indonesian Islam: Explaining the “Conservative Turn,”* Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2013; Chiara Formichi (ed.), *Religious Pluralism in Indonesia: Threats and Opportunities for Democracy*, Ithaca, New York and London: Southeast Asia Program Publication, 2021.

³⁶ Suwignyo, “Indonesian National History,” 129–130. Bachtiar, “Islamisasi Penulisan,” 139–142.

³⁷ Akbar, “Menolak Lupa.”

³⁸ Suwignyo, “Indonesian National History,” 129–130.

³⁹ アスウィ・ワルマン・アダムについては、津田浩司「歴史をまっすぐに正す」ことを求めて——国家英雄制度をとめた、ある歴史家の挑戦——山口・金子・津田（編著）『国家英雄』、二〇一三年二六〇頁。インドネシア科学院は二〇二一年にインドネシア国立研究革新庁（BRIN）に合併された。

⁴⁰ Asvi Wernan Adam, "A. Mansur Suryanegara dan Sejarah Islam Indonesia," [https://serbasejarah.wordpress.com/2010/01/07/a-man-](https://serbasejarah.wordpress.com/2010/01/07/a-man-sur-suryanegara-dan-sejarah-islam-indonesia/)

sur-suryanegara-dan-sejarah-islam-indonesia/（二〇二四年九月五日閲覧）。この記事は、元はインドネシア科学院のHPに掲載された。

⁴¹ Asvi Wernan Adam, *Bung Karno & Kemeja Arrow: Menyingkap Tirai Sejarah*, Jakarta: Kompas, 2012, pp. 241-249.

⁴² ただし、彼はなぜイスラーム商業同盟がティルトアディスルヨに於て一九〇九年四月五日に設立されたと記している。Adam, *Bung Karno*, p. 244.

おわりに

以上のように、イスラーム同盟の設立過程をめぐる謬説は、インドネシア国内で歴史学の立場から繰り返し否定されながらも一九五〇年代から現在まで継承されてきた。サマンフディがプディ・ウトモよりも先にイスラーム（商業）同盟を設立したと語ったのは、おそらく独立運動における自分の功績を誇張するためだったのであろう。この語りは、国内の政治的なイデオロギーをめぐる対立を背景に意義を持つようになり、タマル・ジャヤらイスラーム勢力の一部、主にマシユミ党のメンバーから熱心に支持されるようになった。同じくイスラーム勢力に属するドウリアル・ヌルが文献やインタビューに基づいた調査から論駁したものの、この謬説はタマル・ジャヤら大衆作家の著作を介してインドネシア社会の中に広まり続けることになった。第二回国史セミナーでは、スルヤヌガラらが、イスラーム同盟の設立過程についてサマンフディ・タマル・ジャヤ説を取り上げ、公的な歴史叙述における「民族覚醒」の起源をイスラーム商業同盟の設立日に変更するように求めた。彼らの主張は『インドネシア国史』など政府機関が作成に携わった歴史書に取り入れられることはなかったが、イスラーム出版市場の中では生き残り続けた。そして、一九九八年のスハルト政権崩壊後に従来の歴史叙述の見直しが進むとともに、イスラーム勢力に「保守化」傾向や「多数派主義」が現れる中で、バフティヤルら一部の研究者

やJIBのような歴史愛好家らが「インドネシア史のイスラーム化」を唱え始めた。その結果、イスラーム的ナシヨナリスト史観が脚光を浴び、イスラーム（商業）同盟がブデイ・ウトモより先に設立されたとする主張も取り上げられるようになったのである。

このように、イスラーム同盟の設立過程をめぐる謬説は、イスラーム的ナシヨナリスト史観の一部を成してきた。この歴史観は、一九五〇年代に社会の中にイスラーム的な価値観を広めようとする試みの一環として現れたものである。イスラーム同盟の設立過程をめぐる謬説に関して言えば、タマル・ジャヤの著作の中では、イスラーム的ナシヨナリスト史観はまだ漠然としたものであったが、第二回国史セミナーにおけるスルヤヌガラらの報告の中で学術的な装いをとるとともに明確な輪郭を持つようになる。ここでは、ナシヨナリズムの形成や独立運動の展開において、多数派住民の宗教であるイスラームに中心的な役割が与えられる一方、非イスラーム的もしくは反イスラーム的と見做されるブデイ・ウトモは否定すべき対象とされている。だが、ナシヨナリズムや独立運動を主題として国民国家の存立の承認を論じている点で、イスラーム的ナシヨナリスト史観はインドネシア中心主義と異なるものではない。

スウィグニョやアスヴィの批判に見られるように、イスラーム的ナシヨナリスト史観は、民主化後の歴史叙述の見直しに求められる要件を満たしているとはいえない。さらに見過すべきでないのは、この歴史観が決して新しいものではなく、プルワントのようなインドネシア人研究者が克服を目指しているインドネシア中心主義のナシヨナリスト史観のイスラーム版と呼ぶべきものに過ぎないことである。「インドネシア史のイスラーム化」の主張に認められる安易な反植民地主義的解釈も、旧来のインドネシア中心主義に立つ歴史叙述の名残と理解できる。そもそもイスラーム同盟の設立過程をめぐる謬説の継承過程から明らかなように、この歴史観に立つ研究の最大の問題は、史料をろくに検討せず、過去の研究さえ満足に確認していないことにある。ドゥリアル・ヌルやサルトノをはじめ、留学などによって国外の研究者の世界を知り、学術的な立場をとろうとするインドネシア人研究者はこの謬説を相手にしていない。スルヤヌガラ『歴史の炎』

について、アスヴィは「胡亂な典拠を用いるならば、そこで出会うのは歴史の灰（abu sejarah）に過ぎない」と評している。^①一九五〇年代に生まれ現在まで残るこの謬説も、インドネシアにおける過去の政治的なイデオロギー対立の残滓と言えきものである。

① Adam, "A. Mansur Suryanegara."

【付記】本研究は、JSPS 科研費（課題番号 JP23K00866）の助成を受けたものである。また、本稿で用いた *Harim Abadi* 紙掲載の論説はコーネル大学大学院博士課程の山下 嗣太氏に、アスヴィ・ワルマン・アダムの著作は京都大学非常勤講師の柏村彰夫先生に提供していただいた。ここに記して謝意を表したい。

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科准教授）

The Fallacy of the Origins of “National Awakening” and its Perpetuation: Islamic Nationalist Historiography in Post-Independence Indonesia

by

YAMAGUCHI Motoki

In standard narratives of Indonesian history, the first nationalist organization is considered to have been Boedi Oetomo, founded in 1908, and the date of its establishment is now celebrated as “National Awakening Day.” However, in the 1950s, shortly after Indonesia gained independence, some began to assert that the Sarekat Islam (Islamic Union), or its predecessor, Sarekat Dagang Islam, was established earlier than Boedi Oetomo, which is often regarded as non-Islamic or anti-Islamic. This claim clearly contradicts contemporary historical records and has been dismissed by Western and Japanese researchers and even by most Indonesian researchers. Nonetheless, within Indonesian society, this account has persisted and even seems to have gained support in recent years.

This paper examines how the fallacy regarding the process of the Islamic Union’s founding has been perpetuated. It attempts to elucidate a specific trend in the historical perspective of Islamic groups in Indonesia—a perspective that can be termed “Islamic nationalist historiography”—and its transformation and continuity, as well as contemporary issues associated with it. Special attention is given to how this fallacy has been treated through the creation of official historical narratives by Indonesian government agencies.

The fallacy regarding the founding of the Islamic Union originated from the accounts made in his later years by H. Samanhoedi, who is considered the founder of the organization. He apparently gave such an explanation simply to exaggerate his contributions to the independence movement. His accounts gained significance against the background of ideological conflicts in 1950s Indonesia and were supported by certain factions within the Islamic movement, such as Tamar Djaja and Hamka, both journalists and writers. While another Islamic intellectual who later became a famous historian, Deliar Noer refuted their claims based on documents and

interviews, the fallacy continued to spread within Indonesian society through works of popular writers, such as biographies of national heroes.

At the second National Seminar on History held in 1970, Ahmad Mansur Suryanegara and Yahya Dimiyati took up this fallacy, demanding that the origins of “National Awakening” in official historical narratives be changed from the founding of Boedi Oetomo to that of the Islamic Trade Union. Although their claims were not adopted in government-published history books like *the National History of Indonesia (Sejarah Nasional Indonesia)*, they survived in the Islamic publishing market. After the fall of the Suharto regime in 1998, as existing historical narratives were reassessed, and amidst tendencies of “conservatism” and “majoritarianism” within Islamic groups, some researchers and history enthusiasts began advocating for the “Islamization of Indonesian history.” As a result, Islamic nationalist historiography gained prominence, and the fallacy regarding the process of the Islamic Union’s founding received renewed attention.

In this fashion, this fallacy has become a part of Islamic nationalist historiography. This historical view emerged in the 1950s as part of an effort to spread Islamic values within society. Regarding the fallacy, this historical perspective was still vague in Tamar Djaja’s works but gained a clearer outline in Suryanegara’s account. A notable characteristic of this historiography is its emphasis on the central role of Islam, the majority religion, in shaping Indonesian nationalism and the independence movement while denouncing elements perceived as non-Islamic or anti-Islamic. However, this historiography fundamentally presupposes the existence of a nation-state and discusses its formation from an anti-colonial perspective. In this regard, Islamic nationalist historiography shares an “Indonesia-centrism” with the dominant nationalist historiography of post-independence Indonesia.

Indonesian scholars advocating for reinventing national historical narratives, such as Agus Suwignyo and Asvi Warman Adam, are critical of the claims for the “Islamization of Indonesian history.” Furthermore, although these two have not discussed it in detail, the Islamic nationalist historical perspective is not something new but merely an Islamic version of the nationalist historiography based on an Indonesia-centric perspective, which itself is now being criticized by Indonesian historians as something to be overcome. Finally, as is evident from the perpetuation of the fallacy surrounding the Islamic Union’s founding process, the most significant problem of studies based on this historical perspective is inadequate

scrutiny of contemporary sources and previous studies. The fallacy regarding its founding represents nothing but the remnants of past ideological conflicts.

Keywords; Indonesia, historiography, Islam, nationalism, Sarekat Islam